

展望

鑑賞のモード―古典和歌と現代短歌― 三沢 左右

私たちは古典和歌を鑑賞するとき、現代と全く違う風俗や生活環境の中に、現代の自身に通じる感性を読み取ろうとするのではないだろうか。たとえば、子の愛おしさや恋人への愛情、別れの悲しみなどを。

銀も金も玉もなにせむにまされる宝子
に如かめやも（巻五・八〇三）山上憶良
去年見てし秋の月夜は照らせども相見し
妹はいや年さかる

（巻二・二二一）柿本人麿
「万葉集」に見えるこれらの和歌には、確かに現代人にも通じる根源的な心性が刻まれているように感じられる。

それに対して、現代の短歌を鑑賞するときにはどうだろうか。

ツタヤ以外のレンタルビデオもあるんだね
みたいな顔をきみにされてる

阿波野巧也『ピギナーズラック』
四角いケースを背負った女の子のたぶん
楽器だな、抜けていく改札
うしろまえ逆に着ていたTシャツがしば
し生きづらかった原因

工藤吉生『世界で一番すばらしい俺』
風景を見てるつもり的女生徒と風景であるオレの目が合う

酔って電話をかけまくることなくなり
つまりさみしくなるまでは飲まず

山下翔『meat』
母とみた暮らしのなかに鍋といふものあらざりきおもひおもへど

こうした作品に詠まれるのは、多くの人に経験があるであろう、身近な対象物や生活実感だ。おそらく、若い世代の作者には「自分も他の作者も読者も、同じ現代を生きている」という意識が強い。しかし、こうした作品に対し、「最近の若者のリアル」とする表面的な鑑賞に終始するのでは不十分だろう。作者は作品に「他者とは違う、たったひとりの自分」を込めようとするからだ。

では、私たちはどういう鑑賞態度を取るべきだろうか。端的に言えば、古典和歌に対しては「異文化の中に共通項を探す」、現代短歌に対しては「共通の基盤の奥に作者の個性を探す」と、鑑賞の流儀を切り換えなければ

ならないのではないかと思う。

阿波野巧也は、日常を軽やかな口語で切り取る。「われ」を前面に出さず、身の周りのものへの視点や「きみ」との関係から、涼やかに一人の人物像を立ち上げられる。「最近の若者」とひとくくりされない作者の「今の瞬間」が浮かび上がる。

対照的なのが、自分を強く押し出す工藤吉生だ。卑屈さもあらわに「オレ」が頻出する。場面やテーマは普遍的かもしれないが、感受性豊かな「オレ」が過剰に登場することで、唯一無二の人物像が立ち上がる。

端正な詠みぶりの山下翔、しかし食べ物の歌の比率がとびぬけて高い。一冊を通して食べ物へのまなざしを意識させられることで、「生活実感を湛えた食事詠」で終わらない作者の存在感を読者は感受する。

現代の短歌には、私たちの生きる「現代」がはつきりと刻まれているのはもちろんだ。しかし、読者である私たちは、表面的な「現代」を読み「現代の再確認」をするだけでは、もったいない。同じ時代を生きているからこそ、作品世界に細やかに織り込まれた、作者一人一人の、個性豊かな感受性や問題意識を丁寧にすくい取りたい。そうすれば鑑賞の楽しみは大きく広がってゆく。